外務省

■ 日枝神社 1.25km － 宮中三殿賢所 － 日比谷大神宮跡 1.25km
■ 日枝神社 0.92km －　　外務省　 － 日比谷大神宮跡 0.92km

日枝神社

創建の年代は不詳である。文明 10 年（1478 年）、太田道灌が江戸城築城にあたり、川越の無量寿寺（現在の喜多院・中院）の鎮守である川越日枝神社を勧請したのに始まるという。徳川家康が江戸に移封されたとき、城内の紅葉山に遷座し、江戸城の鎮守とした。

慶長 9 年（1604 年）からの徳川秀忠による江戸城改築の際、社地を江戸城外の麹町隼町に遷座し、庶民が参拝できるようになった。社地は家康により 5 石、元和 3 年（1617 年）に秀忠により 100 石、そして寛永 12 年（1635 年）に徳川家光からの寄付を加えて 600 石となった。

明暦 3 年（1657 年）、明暦の大火により社殿を焼失したため、万治 2 年（1659 年）、将軍家綱が赤坂の松平忠房の邸地を社地にあて、現在地に遷座した。この地は江戸城から見て裏鬼門に位置する。

明治元年（1868 年）11 月の東京奠都の際に准勅祭社に指定された。その後明治 3 年（1871 年）に神祇官直下から東京府管轄に移され、明治 5 年（1873 年）の官国幣社の選定時にも漏れ、そのまま東京府の府社となった。1881 年（明治 14 年）に、氷川神社宮司で日枝神社の祠官を兼ねていた平山省斎が、皇城鎮護の神社が府社であっていいはずがないので、官幣大社にしてほしいと願い出た。この時は官幣大社にならなかったが、東京府・内務省の賛成を得て 1882 年（明治 15 年）1 月 9 日に官幣中社になった。大正元年（1912 年）には官幣大社に昇格した。

大山咋神（おほやまくひのかみ）を主祭神とし、相殿に国常立神（くにのとこたちのかみ）、伊弉冉神（いざなみのかみ）、足仲彦尊（たらしなかつひこのみこと）を祀る。

東京都千代田区永田町２丁目１０−５

日比谷大神宮跡（皇大神宮遙拝殿・神宮教院）

明治 5 年（1872 年）に開設された神宮司庁東京出張所（伊勢神宮の事務機関である神宮司庁と東京の教部省との連絡のための出張所）、および、翌年その構内に開設された東京神宮教会（伊勢神宮の教導機関である神宮教院の東京支部）の両所にあった神殿を継承して、明治 13 年（1880 年）4 月 17 日、有楽町の大隈重信邸跡に落成した皇大神宮遙拝殿が当社の起源である。これは、当時の明治政府が目指し

ていた祭政一致・大教宣布の一環として作られたものであった。

明治 15 年（1882 年）1 月、明治政府の方針転換により神社と宗教活動は分離することとなり、伊勢神宮でも神宮司庁と神宮教院を分離することとなった。皇大神宮遙拝殿は神宮教院に属することとなり、同年 5 月、神宮教院が神道神宮派に改称する際に、当社も大神宮祠と改称した。一般には、所在地名から日比谷大神宮と呼ばれていた。明治 32 年（1899 年）神道神宮派が解散して新たに神宮奉斎会が作られ、当社は神宮奉斎会本院と改称し、伊勢神宮奉斎会の本部機関となった。尚、三重県宇治山田市（現・伊勢市）には神宮教院大本部が置かれていた。大正 12 年（1923 年）の関東大震災で社殿を焼失し、昭和 3 年（1928 年）、現在地（現東京大神宮）に再建・遷座して、以降は飯田橋大神宮と呼ばれるようになった。上述のように、第二次大戦以前は神社という形ではなかったので、社格の指定はない。ゆえに氏子地域も存在しない（当社所在地は築土神社の氏子地域にあたる。）。第二次世界大戦後の昭和 21 年（1946 年）4 月、宗教法人東京大神宮として再発足した。千代田区有楽町 1 丁目 1－4

外務省

明治政府は霞ヶ関、大手町、丸の内等のは大名藩邸跡を接収し、官庁街や軍事施設として利用した。1871 年（明治 3 年）に外務省は銀座から霞が関に移転し、江戸時代に建てられた大名屋敷の福岡藩黒田邸上屋敷をそのまま使用していたが、1877 年（明治 10 年）2 月 1 日に焼失した。1881 年（明治 14 年）、フランス人建築家ボアンヴィル（Charles Alfred Chastel de Boinville）の設計による新庁舎が竣工した。東京都千代田区霞が関 2-2-1

備考

二等辺三角形の底辺の真ん中に護られた黒田家を利用して外務省が置かれた。外務省に気を集中させるしくみだったのか。しかし、関東震災後の昭和 3 年に日比谷大神宮は東京大神宮となり、この場所を離れている。次頁の日本銀行をご覧ください。